

平成28年度 試験研究機関重点化事業評価表(継続分)

研究機関名	事業名	目的	実施期間	内容	期待される成果及び進捗状況	総合評価	評価コメント
富士山科学研究所	富士山火山防災のための火山学的研究-噴火履歴と噴火シミュレーション-	富士山の火山防災のための研究は、平成28年度の重要なかつ迅速な対応が必要な施策に位置づけられている。本研究では、富士山の噴火災害を軽減するために、富士山の過去1万年の噴火履歴の地質学的・岩石学的解明とその成果に基づいた噴火シミュレーションを行う。	H26～H29 (4年)	本研究では富士山の噴火災害を軽減するために、富士山の過去の噴火履歴の火山学的研究と火山観測結果に基づき、噴火シナリオを構築する。このシナリオに基づいた溶岩流・降灰等の噴火シミュレーションなどの予測手法を確立する。さらに火山防災対策情報発信および災害知識の普及・啓発活動の仕組みについて検討する。	・富士山の火山防災において、火山災害の軽減に貢献することが期待される。 ・地元市町村等への情報提供、情報発信の拠点。 [進捗状況] ・火口分布の特定作業、過去1万年間の噴火履歴の解明作業、溶岩流流下シミュレーションによる到達予報手法の確立作業、災害知識の普及・啓発の仕組みづくり作業を進めている。特に前者は、産総研から出版された富士山の火山地質図を参考にして不足している地域の調査を進めた。	3.5	サブテーマ4つからなる富士山火山防災のための総合的な研究課題であるが、テーマ間で進捗の遅速は見られるものの、概ね計画通りに進行していることは評価できる。今後は、各々のサブテーマが相互に関連して富士山火山防災に繋がる大きな課題であるので、共同研究者も含めた担当者間での役割分担を明白にし、サブテーマ間でも相互に連携を密にながら課題を進捗させてい必要がある。なお、サブテーマ3の溶岩流の流下シミュレーションの検討においては、富士山の溶岩の粘性や温度などその特性に十分配慮して実施してほしい。
総合農業技術センター	高冷地における冬季のアスパラガス伏せ込み栽培技術の確立	高冷地における冬季の有望品目としてアスパラガスの伏せ込み栽培があるが、他の品目との作業が重複、株の掘り上げや伏せ込み作業が重労働、また収穫期間短いなどの問題点がある。そこで、省力的な育苗、株養成方法を体系化し、安定した収益を得るための連続的な収穫が可能となる伏せ込み栽培技術を確立する。	H26～H28 (3年)	セルを活用した省力的な育苗方法を体系化する。また、定植時期の違いによる収量への影響を明らかにし、収穫期間の連続化を図る。さらに、連続収穫のための伏せ込み技術を確立する。	・国内生産量の少ない冬季に、新鮮なアスパラガスが供給可能となり、新たな収入源が確保できる。また、地場野菜の販売品目が拡大され、直売所などの売り上げ増加や地域の活性化に繋がる。これにより、山梨県内での新たな経営品目となり、ブランド化による産地づくりに寄与する。 [進捗状況] 省力的な育苗管理のための播種時期やセルトレイサイズ、および充実した根株を育成するための定植時期を明らかにした。予備試験として立茎栽培を行ったところ、収量は減少した。	3.5	本試験で試作された製品を見ると、コストや耐久面等から普及性は極めて疑問であり、県業界の要請に基づいて始まっている内容とは思わず、実用化に向けての見直しは低いと判断を得ない。更に、本試験の背景にある課題や問題点を解決するために、データを取得・解析すべき手法がとられず、本課題の試験内容は、研究的側面が極めて低いものとなっている。
総合農業技術センター	富士北麓地域における夏秋どりスイートコーンの倒伏軽減技術の確立	富士北麓地域で産地化されているスイートコーンは、消費者から人気があるため年々作付面積や作期が拡大している。一方で、栽培期間の延長に伴い、台風等の気象災害に遭遭する機会が増え、特に倒伏による品質低下が問題となっている。そこで、スイートコーンの品質低下の最大要因である倒伏による被害を抑え、高品質で安定した生産を行うための栽培技術の確立を図る。	H26～H28 (3年)	倒れにくい草姿を作るために耐倒伏栽培技術や倒伏軽減技術を確認する。また、倒伏後の品質低下抑制技術を確認する。最終的には、倒伏軽減技術の組み合わせ実証を行う。	・台風、ゲリラ豪雨等気象災害に対して被害防止や被害が軽減され生産の安定化が図られる。また、長期間に安定して生産されることで、市場出荷や道の駅および直売所などの販売が拡大され「富士山やさい」としてのブランドが高まり、農家所得の増加が図られると共に、組織活動や地域活性化に繋がる。さらに、農家の労力に応じた技術提案により、小規模から機械化による大規模化まで技術導入が可能となり、地域全体としての生産拡大が図られる。 [進捗状況] 短稈栽培技術について、他の技術と組み合わせた試験を実施したところ、1条栽培に於ける移植栽培およびエスレル処理による効果は見られたが、1果重が小さくなった。また、短稈栽培における施肥量の試験を行った結果、短稈栽培に適する施肥量・施肥方法が明らかとなった。	3.4	すでに、耐倒伏栽培、倒伏軽減、倒伏後の品質低下抑制について、一定の成果が得られており、研究の進捗状況は順調である。大雨や強風による被害対策として、倒伏抑制技術および被害を受けた後の影響を最小限に抑える栽培技術について新しい知見も得られていることから研究を継続する必要性は高い。最終年度には、一連の技術をマニュアル化し、得られた成果を実証団などを利用して迅速に普及していくことが望まれる。
果樹試験場	県育成オリジナル品種の栽培技術の確立	県育成ブドウ品種およびモモ品種について、早期普及・産地化を図るため高品質果実生産技術を確認する。	H26～H28 (3年)	ブドウおよびモモについて、県育成品種の高品質果実生産技術を確認し、栽培者に普及するための栽培指針を作成する。さらに、導入が見込まれる施設栽培の適応性等の確認も行う。	・県育成ブドウ品種および県育成モモ品種について「やまなしブランド」を確立することにより、やまなし農業ルネサンス大綱が目指す「次代につながる力強い産地づくりの推進」に貢献できる。 [進捗状況] ブドウ3品種およびモモ1品種について露地および施設栽培での高品質果実生産技術を検討している。 また、ブドウ1品種について貯蔵性に関する試験を実施中である。	3.6	ブドウ3品種およびモモ1品種について高品質果実生産技術を検討し、一部、成果が得られていることから進捗状況は順調である。今後、それぞれの品種の欠点を補い良い特性を活かすため、剪定方法、生育調整処理、長期貯蔵適性、施設栽培への適応性など幅広い角度から試験する計画であり研究を継続する必要性は高い。最終年度に向けて、生産が本格化する前に管理作業を含めた栽培技術指針を早期に作成し、栽培者の技術向上と生産の拡大に結びつけることを期待する。
果樹試験場	醸造ブドウの作柄データベースを構築するための調査・分析方法の策定	醸造ブドウの高品質化には、果実品質と環境要因、およびブドウの成熟度の把握が重要である。このうち、成熟度を把握するためには、果実品質を同じ基準で正確に調査・分析する方法が必要である。そこで、本県の栽培規模に適した調査・分析方法を確立する。	H26～H28 (3年)	既存の200粒サンプリング方法や、果汁分析方法を参考に、従来の生食ブドウの調査方法と比較し、その実用性を明らかにする。また、同時に試験醸造を行う果汁、およびそのワインと比較してその精度を検証し、実用的な調査・分析方法を確立する。さらに、やや広い区画に向くサンプリング方法についても検討し、最終的に本県の栽培規模に適した実用的な調査・分析方法を確立する。	・成熟度の調査・分析方法の基準を明確化することで、醸造ブドウの収穫適期の把握が可能となる。これにより、その年の環境条件に留意した栽培を行うことで、環境要因による影響を受けにくいブドウの生産が期待される。 [進捗状況] 搾汁率を50%に統一した結果、200粒法は糖度、pH、総酸含量について10房20粒法と同等以上に相関が高かった。また、10房20粒法では測定できない比重糖度、資化性、窒素含量について、200粒法による測定では、発酵前果汁との相関が高かった。しかし、甲州ブドウについては、搾汁率が50%以下では分析精度が劣る傾向がみられた。	3.3	これまでに200粒法による測定で、比重糖度や資化性窒素含量と発酵前果汁との相関が高いことを明らかにしており、進捗状況は順調である。生産現場は果実品質を同じ基準で評価できる調査・分析方法と本県の栽培規模や気候などに適した基準の策定を望んでいることから研究を継続する必要性は高い。甲州ブドウについては、搾汁率が50%以下では分析精度が劣る傾向が見られるので、品種にあった手法の改善が必要である。最終年度になるので、分析方法をマニュアル化し、その年の状況に応じた高品質な醸造用ブドウ収穫適期の判断に活用されることを期待する。